

# 惜別 宮城正雄



去る二月七日、「学園花の村」創設者宮城正雄が逝去いたしました。九十五歳でした。宮城正雄の推進してまいりました学園花の村活動への数々の支援、ご指導に心から御礼申し上げます。お願い申し上げます、お寄せ戴きました皆様の温かい追悼文を「はなの村だより」第66号特集として左に掲載、宮城正雄の思いを受け継ぐよすがとさせていただきます。

ありがとうございました。

学園花の村一同

美しい郷土・美しい日本人の心を  
宮城さんへの供養に

掛川市 溝口 博之

日本の農林業がかくも荒廃してしまつた原因は戦争とその後米国統治以後、日本人の心が利己主義、利益優先に変化したことによるものだ。先日東北の被災地に行つて、町ごと消滅した後の瓦礫の山を見た。鉄骨、プラスチック、化学繊維、新建材、木くず、動物の死骸……。必死に働いて外国から買い集めた財産がこれだったのか。日本の家は木材と土、食べ物は米と野菜と魚、生まれ育つた郷土を愛し、皆で協力し合つて生きてきた。宮城さんはこういう日本人の心を取り戻したかったのだと思う。美しい郷土を作り、美しい日本人の心を取り戻すことが宮城さんへの一番の供養なのだ。

志士・宮城正雄を憶つ

日向の農人 津野幸人

宮城正雄先生！  
人は決して死なない。  
記憶の中で、より鮮やかに生きている。  
貴方は勤労の志士であつた。  
貴方の瞳には常に未来が映つていた。  
貴方の軍囊に収めた一冊の本  
「宮翁夜話」、  
貴方のジャイロコンパス。  
貴方は軍人恩給の全てを世に推譲された。  
貴方は報徳の種子を大地に蒔かれた。  
かくして、「学園花の村」は芽生えたのだ。  
貴方がわれわれに推譲されたのは、  
貴方の人生であつた。  
貴方との邂逅は本真に幸せであつた。  
北辰の光芒は、天人両道の間を軌跡する。

## 悼

歴戦の勇士奪はれ春動く

史尚

勇士が去つた。尊徳が体に染み込んでいた。植民地自決の戦線に参加しようとした。戦後は夜々と駿遠の大地に生きた。

農村から多くの青年が都市へ雪崩れ経済は成長した。その分地方は過疎化して放棄地が拡大した。やがてバブルが崩壊して行き所に迷つた。  
勇士はここへ来て耕せと叫んだ。

古い農業のしがらみはこの障害になつていたが勇士は先頭に立つて改革した。  
勇士の去つた前年東日本に大きな災害があつた。日本が今原点に還つて進路を見出そうとしている。もはや地方の時代。勇士の屍を踏み越えてみな堂々と進むと  
思う。

安らかにそして、支援を。

横浜市 高橋 史尚

宮城さんの笑顔

神奈川県藤沢市 馬場 定雄

宮城さんとの出会いは「小田原報徳ゼミナール」でした。私の現役時代は神奈川県農協中央会です。当時は農協教育センターで事務局長の立場にあり

ましたので一度だけゼミナールに会議室を提供する事になり、宮城さんにも一泊の合宿研修に参加していただきました。

その際「こんなに環境のよいところで神奈川県内の農協中堅職員が養成訓練されるのか、」と言われうらやましいと笑顔でほめていただきました。

又「新むら研究会」では、どうしても横浜での会合が多く宮城さんに来ていただくためにはなるべく交通の便の良いところで休日に借りられる会議室を確保しなければなりません。

しかし、このような条件では確保が難しい状況の中で、新幹線新横浜駅前にながわ生協本部があり、そこには浜田さんが居られる事を思い出しました。

早速「新むら研究会」が「都市と農村のかけ橋になること」を目的にした組織であることを話して協力をお願いしたところ幸いにも「理解いただき休日でも会議室を提供していただける事になりました。ここならば、新横浜駅から徒歩10分で休日使用が認められる事を宮城さんに話したところ、普段から笑顔の絶えないお顔を満面の笑顔で大変喜ばれたことを改めて思い出しました。

## 宮城正雄さん追悼

茅ヶ崎市 野口幹夫

宮城正雄さんが亡くなられ、有縁の者に追悼の言葉を寄せてもいいとお誘いをいただきました。ほんの数回のふれあいのことしかない私にその資格はありません。しかし薫陶を受けた人から改めて宮城さまの偉大な生き様を教えられて、我が身を振り返って想うこととときりで、ささやかな言葉をお捧げします。

宮城さんの偉大さは二宮尊徳の偉大さでもあるとおもいます。尊徳さんの偉大さは、すべてのものに徳が備わっているという発見から始まる一連の思想の偉大さもありますが、何よりも彼を慕う人々に、彼の生き方を真似をしていくようにいざなうところにあると思います。この尊徳の不思議な魅力が、忠実な尊徳信奉者でおられた宮城正雄さんにそっくりのりうつっておられました。

1999年掛川で行われたむら研で機会を与えられ「尊徳運動批判」と語りました。熱心な報徳運動推進者の皆さんの前で外部からの遠慮ない意見をのべたので、当然会場ではざわめきがあったのですが、行事が全て終わって掛

川駅まで送ってくださった宮城さんから「あれは面白かった」とにこやかな笑顔で言葉をかけてくださったのです。感謝！

## 都市と農村の連携を訴えた宮城翁

小田原市 田嶋 享

最初にお目にかかったのは平成五年小田原での報徳勉強会の時でした。

これからの日本の農業には大変なことが起こる、それは外国からの輸入が多く、国内では荒廃農地が多く、高齢者が多く、農業の担い手の少ない状況をはつきりと、大きな声で私たちに伝えてくれました。

必要な方策は何か。それが都市と農村の一体化だと言われ、それに私は感動を受けました。その後掛川に行く機会があり何回かお目にかかりました。其の時に見た大きなブルドーザーに乗り山地を耕していた宮城さんの姿が今もありありと目に浮かびます。

農民の心を代表して、国に新しい農業改革のあり方を訴えた宮城さんの「農地を荒廃から護る運動」は小さいものでしたが、今日では一番必要なこととなったと思います。これから皆さんと力を一つにして宮城さんの意思を伝えて行きますよう。

最後に、「冥福をお祈り申し上げます

## 徳望の人宮城正雄翁の追憶

愛知報徳会 星野雅良

宮城正雄翁が、平成元年11月より古谷報徳社発行の「報徳だより」に、3年3カ月を掛けて書いた「二宮翁夜話と私」は、大日本報徳社の神谷慶治社長が「至誠実行千載伝」と題字に揮毫されたように、私も感動して拝読した。

私は、宮城翁から「二重な感謝の言葉」を頂いた思い出がある。

それは平成4年8月30日(日)・31日(月)、小田原市に於いて第22回全国報徳大会「福住正兄翁百年記念」が全国報徳団体連絡協議会主催で開催された。

懇親会・宿泊場所は「湯本福住旅館」である。申すまでもなく福住正兄翁の家である。

来賓として、榛村純一掛川市長も臨席された。

この時、正兄翁の曾孫田中翠子先生(お母様の生家、ご主人は田中六助先生で、大平内閣の官房長官・通産大臣・自民党政調会長・幹事長になられた政界の大物である。)も臨席されて、私がそのことを懇親会の席上で紹介する役になり、上座へ座ることになった。

榛村市長の左隣が私で、その左側が

宮城翁、その次が田中翠子先生であった。私は、宮城翁が榛村市長と並んで今後のことをお話しするのに好都合と考えて、席を交代した。

たったこれだけのささやかな行為であったが、翌日宮城翁から「一度市長と懇談したいと思っていたが、隣席に並ぶことができて充分話し合えて嬉しかった。本当に有り難かった」と丁寧なお礼の言葉があった。

学園花の村事務局長藤本将氏が平成15年3月1日付「民主報徳」に、「宮城さんの『農地を荒らすな』運動を応援しよう」という記事の中に「農地が荒廃するのを憂え立ち上がった当時、静岡県小笠郡古谷報徳社社長の宮城さんの話を聞いたのは、平成5年11月、小田原の報徳博物館であった」と書いてある。

小笠町の一町民であった宮城翁が掛川市長榛村氏と胸襟を開いて、自らの「農地の崩壊を防ぐ方策」の私案を語り合えたことは、貴重な一刻であったことと推察する次第である。

私は、心服する宮城翁が逝去されるまで、愛知報徳会の機関紙「虹橋」と辻組報徳会のささやかな会報「辻組報徳」を贈り続けた。

謹んで宮城翁のご冥福をお祈りする。

## 弔 辞

## 光陽の里の耕作人を代表して

松井 道夫

宮城さん、いよいよお別れの時がやってきました。いつかはこの時がくることを覚悟はしてはいましたが、宮城さんとおつきあいさせて貰うようになって十七年余、その間のことを思い出しますと、万感こみ上げるものがあります。

はじめ、宮城さんにお目にかかったのはこの東林寺の写経観音の寄付者名簿の作成の時でした。大日本報徳社に紹介されたら宮城さんが私の仕事を訪れたとき、なんだかまぶしい人が現れたなあ、と思いましたがそのまぶしさの意味が後日分かりました。

名簿の校正のために宮城さん宅をおたずねしようと車で向かったときのことです。当時の小笠町の古谷という地名に関して土地勘は全くなく、出たとこ勝負で出かけてきたのですが、どこで訪ねても「宮城正雄さん？それなら……」とすぐに分かって紹介してくれるのです。「何をしてる人かな？すごい人だなー」位に思っていたのですが、宮城さんのすごさは次第に分かってきました。太平洋戦争に近衛兵として従

軍し、インドネシアで敗戦、捕虜にな

ったときのこと、おとなしく国に帰ることができずに、私達は何のために

戦ってきたのか、アジアの人民を解放するため、太平洋共栄圏建設のためではなかったのか、今ここのインドネシア

では独立戦争が行われようとしている、この国のために私達はインドネシア独立のために戦うべきだと軍隊を脱走し、

独立義勇軍に加わろうとした話。また戦後しばらくしてインドネシアの戦地跡を訪ねたとき、日本軍のために燃や

されてしまったという言い伝えのあるモスクを知り、日本の名譽のためにも

その言い伝えを正しく訂正すべくモスクの再建を戦友達に呼びかけ、さらには国会議員の所まで押しかけ、モスク

再建を実現した話、などを宮城さんの口から直に聞きました。東林寺写経観

音の建立以後、自分の考えを文にまとめては私の所へ持ち込んで「こんどは……」とそのやろうとすることを熱く

語っていくのでした。あるときなど、農林省のお役人の話を聞き、「このまま

では日本の農業は二十年後にはなくなってしまう。」と聞き、「なにか方法はあるのですか？」と問いかけた宮城さんにお役人はしれつとして「ありません」という話だったと顔を赤くして、「ならば、俺たちがやるしかないん

じゃないか」とおこっていました。宮

城さんは当時七十代の後半、父と同じ年でした。私の父の弱り様から「宮城

さん、意見や案ばかりじゃ計画倒れになっちゃうよ、なにかはじめなければ……」、と間に合わなくなることを心配

しての若造の私の言葉に気分を害することなく、「それなら、ぜひ仲間になつて下さいよ」と引きずり込まれ、掛川の地に光陽の里約十ヘクタールの大市

民農園建設の手助けをし、百姓仕事はずぶの素人の私が、今では田圃三反余畑二反あまりと格闘するにわか百姓になり

ました。それでも事務局として、この市民農園はあやしいと掛川市農業

委員会から呼び出しを受け、説明にだけ、最後には「わかりました。がんばってください」と彼らに言わしめた、

宮城さんの行動力に頭が下がりますが、私は宮城さんのブレーキ役になること

が多かったように思います。宮城さんにしてみれば、歯がゆかったことと思

いますが、役所との交渉上、やむを得ませんでした。お許し下さい。

全報連という、大日本報徳社とは別の系列の報徳団体に一緒に参加した時のこと、農林省まで農家資格の条件緩和の陳情に出かけた話等、思い出は尽

きません。宮城さんのまぶしく見えるわけは

「使命感に燃えて、損得抜きでがんば

っている宮城さんの命の輝く姿だった、と私は思っています。それは後光と言

つてもいいのではないかと私は思っています。それ以後注意してみると世の中に後光の差している人を時々見かけ

ることができません。その人たちはやはり宮城さんのように使命感に燃えて損得抜きでがんばっている人たちでした。

宮城さん、ありがとうございました。私達、学園花の村の村民、また光陽の里の六十名を超す会員達は宮城さんのおかげで今、鋏を握っていられます。

宮城さんの目指した、小さな農業はまだまだですが、確実に一歩ずつ前進して行っています。誰かが「市民農園、

市民農園って馬鹿の一つ覚えみたいに言うけれど、三年も経てば草ぼうぼうの荒れ放題の所ばっかりだ。あんた達の所もそうなるんじゃないの」と言っ

てましたが、私達の畑は無農薬、無化学肥料の自然相手の様々な工夫を凝らした楽しい畑です。草と格闘しない、

草と仲良くする気持ちの優しくなる農業です。その畑が当初十名あまりの人

でスタートしたのが、今では六十名を超すまでになりました。決して荒れ放題の……ではありません。

初期に山を削っただけの草もろくに生えていない、赤茶けた土にリプロカ

ら分けて貰った食品残渣の半熟堆肥を宮城さんが一人でウンボですき込んでくれました。

その事情を知らない後から入った会員は草の生えすぎること何の疑問も持たず、それどころか愚痴をこぼしておられます。すべては宮城さんのおかげなんです。倉馬の里にしても、四百日に及ぶ篠竹刈り、熱い炎天下に一人で黙々とこなす宮城さんの姿に地元の人々は皆感心していました。その努力がなければ今の倉馬の里はありません。

宮城さん、お疲れ様でした。私達は宮城さんの遺志を継いで不耕作農地解消に向けて一步一步、前進していきま。どうかゆつくりとお休み下さい。

最後にもう一度言わせて貰います。本当にありがとうございます。

平成二十四年二月九日

宮城正雄さんを悼む

…… 学園花の村の古里桜は

今年も咲きました……

掛川市 小関 栄

宮城正雄さんに初めてお会いしたのは、平成十五年夏、小田原市栢山の尊徳記念館でのゼミナールでした。その時の宮城さんは「私と二宮翁夜話」と題する御講話をされましたが、私には宮城さんは将に尊徳先生の生き写しと

の第一印象でした。平成十七年五月我が家へお出で頂いた時は学園花のむら・光陽の里開設の経緯や運営のお話しをされ、報徳を実践している方と強く感銘しました。

光陽の里に多い「古里桜」（琉球自生の緋寒桜に雲南のシナ桜を交配した新品種）は宮城さんの中国の思い出の桜。この里を彩る花木として宮城さんの発案で会員や近隣の人たちが植えられたものでした。（二〇〇七年四月、花のむらたより第三十六号掲載）

宮城さんはすでに逝かれ寂しい限りですが、植え育ててくれた古里桜は、今年も美しい花が咲き香を漂わせて呉れて宮城さんを偲べれます。有難うございました。

宮城翁との思い出

光陽の里・楽農会 石樽 由美子

私が初めて宮城さんを知ったのは、光陽の里に畑を借りて農業を始めた頃でした。ビデオで花の村の活動を紹介したいので、参加してもらえないかというお話だったと思います。農作業の様子や、倉真での藤本さんや柴さんの田植えのお手伝いのビデオ出演でした。その後、初馬と倉真の境の棚田の跡に村を作ろうという計画で開墾が始り、宮城さんは、毎日毎日一人で草刈り機

を担いで、篠竹で覆われたかつての棚田の跡を見事な畑に変えていきました。その執念と行動力には頭が下がる思いでした。私も時々お手伝いに行き、昔の話などを伺ったものでした。翁の行動力は八十を超えた老人とは思えないもので、次々と形あるものにし、倉馬の里として立派に開村式を行うまでにされました。

しかし、宮城さんの考えを理解し理想とする社会を建設するには、まだ社会が追いついていません。宮城さんがあと十歳若ければ・・・と思います。これから夢半ばで逝って仕舞われた翁の遺志を、花の村の後継者の方々が継いでいかれることを心から望んでいます。

宮城さん追悼文

倉馬の里 柴 桂子

光陽の里では今日も60名程の人たちが、農を楽しみ、野菜に関してはお給自足をしている。そして畑から農の楽しさ、喜び、大切さを発信している。倉馬の里では1年を通じて所々に花が咲き、光陽の里と共に存在と意義が広まりつつある。

宮城さんの蒔いてくださった種は大きく広がっている。畑で草取りをしていると、いつも、少

し前かがみの姿勢で「こんにちは」と満面の笑みで近づいてきてくださった姿を生涯忘れることはない。大変多くの事を学ばせていただいた人生の恩師・宮城さんは、これからも常に側に居て、生前と同じように言葉ではない教えをしてくださると思う。

宮城さんと光陽の里

（宮城さんをしのんで）

光陽の里・楽農会 野田 芳宏

宮城さんと最初にお会いしたのは、今から13年ほど前の平成10年の夏だったと思います。当時サラリーマンをしていた、なんとなく毎日がつまらなく、農業ができないかなと考え、休みのたびに当時「田舎暮らしの本」という月刊雑誌をみて、田舎の安い農地付の民家に移住できないかと思い、九州や中国地方、愛知の山間部などの情報を探して歩き回っていました。九州大分の赤峰さんの農場をたずねたり、奈良の川口由一さんの農場研修に参加したり、「わら一本の革命」の自然農法の福岡正信さんをたずねて四国の松山まで伺ったことを思い出します。幸いにも福岡さんの自宅に押しかけ話をうかがうことができ、夫婦揃って大感激でした。

そんな折、今は絶版になっていると思いますが、「百姓天国」という雑誌の中で、大東の方で農業をやっておられる相羽さんや池守さんの記事を見つけた

合戸の池守さんの畑を見学させていただき、池守さんから掛川の光陽の里を学園花の村が実顕農地として7町歩ほど借りうけている事をうかがい、それを実際に言い出された宮城さんを紹介していただきました。その夜のうちに南風園の宮城さんの自宅に伺いお会いしたのが宮城さんとの最初のお会いでした。その夜、いろいろ宮城さんのお話をうかがい、「二宮翁夜話と私」の本のことや、報徳の話などもお聞きし、翌日光陽の里に案内していただき、その日に今の畑を1町歩ほど貸してもらえぬことになりました。

当時全くの素人のサラリーマンが、広い農場を借りることなど難しく、まして新に農地として開拓された新しい土地の一面を借りられるという本当に幸運に恵まれたのは今思うと全くラッキーな宮城さん、池守さんとの出会いだったと、ただ感謝あるのみです。いま思うと当時まだ50代で年齢のこなど余り考えておりませんでした。2月7日宮城さんがお亡くなりになったという知らせを受け、その夜お通夜に駆けつけ、当時宮城さんが80歳だったと改めて知り、なんとお元気だったのだろうと考えると本当に残念でたまりませんでした。

はじめての光陽の里での地主さんたちとの契約のこと、畑に南榛原開発の泥炭堆肥を入れる話し合い、リプロの堆肥をダンブ何十台も運び入れて元気にブルドーザーで慣らししておられた姿、赤いカンナを畑に植えようと苗作りをされていた姿、今ちようど満開になつていて桜の苗木を作つて光陽の土手に植えられた姿、そうした実際に体を動かして実践された宮城さんの実行力と元気が改めて思い浮かびます。

今光陽の里も60名ほどの人たちが元気で農業を楽しんでいられるのもひとえに宮城さんのおかげだったと思ひ、深く宮城さんのご冥福をお祈り申し上げます。

### 農業へ熱い想い

菊川市 すぎき 麗華

宮城正雄氏とは三十年ほど前の宮城家母屋を建てた時、「棕櫚(しゅろ)を玄関に使えないか?」と聞かれた事で、加工してあげたのが最初で、「面白い発想をする人だと思いました。暫くして「近くの山の上に報徳文化村を作りたいので構想図を描いてくれないか。」と訪れました。又暫くすると今度は「掛

川に7haのよい土地を見つけたので市民農園にしたい。一緒に加わってほしい。」と言つて来ました。

少年のような目を輝かせて真剣に語りかけてくる姿に感動し、お手伝いをさせていただくようになりました。「学園花の村」、「光陽の里」の始まりでした。以前描かせていただいた「報徳文化村」を実現させた「倉馬の里」も作り、思ったことを次々に実現させた。パワーで多くの人を引き寄せ、日本の農業不安に立ち向かったのです。まさに生涯青春の宮城さんの人生は農業の救世主。

ありがとうございました。

### 惜別

武蔵野市 武内あや子

『二宮翁夜話』一冊を持つて宮城正雄は七年半、中国南部から東南アジア一帯にわたる戦場に身を挺し、インドネシア独立に参加する正義は挫折したが、運命は彼を故郷の牧の原に連れ戻した。彼は変貌して行く戦後の日本を見つめながら、先ずわが家の復興に悪戦苦闘の末「南風園」の経営の土台を構築した。

他方、慰霊のための現地巡礼、綿密な計画によるバイユ・モスクの建設

天安門事件で挫折はしたが古里桜の試作栽培とその事後処理、古谷の東林寺の写経聖観音像の建立などなど、精神的に数々の業績を残した。最後の仕事は「学園花の村」の創設である。道半ばではなく、「みんなでやろう小さな農業」の基礎の礎を奮われたのです。これこそ「故道に積もる木葉をかきわけて天照神のあし跡をみむ」の実践です。

宮城正雄は誠心誠意、二宮翁と共に歩かれました。

### 追悼

静岡県芝川町 常盤敏行・勝子

宮城さんには2000年5月、光陽の里に私も夫婦が入植したとき案内して頂きました。5反5畝の広いカンナ列畑を耕して野菜を作り、野菜ボックスの宅配、朝市の出荷等、そして倉真での布マルチ稲作をしてきました。放し飼いのウコッケイ一家が遊ぶ広い畑の中の小屋でともに昼食を食べた事、柴野さんの縁でNHKテレビに出た事等、なつかしい思い出です。

2005年12月、私どもは芝川町稲子二引越し荒れた田畑を無償で借り、自給百姓を始め、現在に至っています。

## 宮城正雄さんを偲ぶ

大日本報徳社社長 榛村純一

宮城正雄さんに最初にお会いしたのは、平成十年、学園花の村を設立された頃だったと思います。確か八十二歳だとか聞いて、顔の色つやもよく、いかにも頑健で、独特の発想と体験をお持ちの方だと思いました。

お話は、若い頃の牧之原の茶園開墾の苦労話から始まって、第二次世界大戦で中国、印度、マレー、スマトラ、ビルマを転戦し、英軍の捕虜となり一年半拘束、使役されたこと、帰還して茶業、畜産をやり、サボテンやアロエを栽培、観光農園のはしりの様な商売をやったこと、そして今は八十歳を超えて、報徳の教えの最後の実践として、荒廃農地を再生し、都市で農業をやりたい人を受け入れたいなどと熱っぽく語られました。

その後何回か、エコポリスの隣接地にできた光陽の里の集まりや倉馬の里づくりの計画についてお話を伺いました。収穫祭などのイベントにも招かれ、美味しい焼き芋をいただきました。

ある日、私の書いた記録ですと『二宮翁夜話と私』という冊子を贈呈されました。十八歳年下の若い市長に、『二宮翁夜話』の本をもって戦地に赴き、その教えを絶えず実践して難局を乗り

切ったことや、自分がやろうとしてき

た報徳文化村から倉馬の里のクラインガルテン構想に至る自分の心の動きを詳しく伝えたいと思われたからでしょう。

一読、圧巻として注目したのは、スマトラで敗戦を迎えた時の次の一節でした。「私には抑えきれない鬱勃たるものがあつた。インドネシアの独立はどうなるのだ。白人優位の帝国主義を打ち砕き、有色人種の白色人種に対する壮絶なる戦いが大東亜戦争ではなかったのか。Ⅱ中略Ⅱ 俺はスマトラに残り独立戦争を戦い続け、日本人として信義に殉ぜようと、スマトラの土となることを決心し軍を離脱した」の下りの文章でした。

一番びっくりし、感心したことは、倉馬の里になる草芒々の荒地をたつた一人で開墾している姿を何回も見たとでした。もちろん倉馬の里の開村式には、報徳社社長と市長をかねて出席しましたが、二箇所居住市民農園について、農振法や都市計画法の制約を突破してほしいと強く訴えられました。私は、いよいよ難しければ特区を申請しようと思いましたが果たせず、宮城さんの夢を十分お手伝いできませんでした。

至誠実行の一生が幕を閉じたという感を深くしています。

## 追悼 宮城正雄さん

鎌倉市 湯山浩二

日本中が

長命の時代を迎えていますので95才まで長らえた宮城さんもその中のお一人

涙は不必要と断じたもの思い出すのは

あの、男二人の「新婚旅行」でしたネあれは

宮城さんの古戦場・スマトラのアチエの街を訪ねたとき

小高い岡の上のホテルからの眺めは絶景でした

たしか大きな汽船が

ゆっくり汽笛を鳴らしながら通り過ぎてゆきました。

まるで、ヨーロッパのような景色でした。

何を二人で喋ったのか

もう何十年も経った昔のことですから

すっかり忘れてしまいましたがああのスチール写真の一枚のような鮮明な画像は

いつまでも残って行くことでしょう

合掌

## 宮城翁の心残り

川崎市 藤本 将

農地の荒廃を憂い、担い手のいなくなった農村に都会の人の手を借り、荒廃農地の再生を図ろうとする宮城翁の思いを具現化したのが学園花の村である。その実験農場として光陽の里や倉馬の里がオーブンした。さらには滞在型クラインガルテンの取り組みを企画した。宮城翁はその実現に向けて市や県のみならず国にまで行き働きかけた。

しかし行政は農地法を楯に首を立てに振らない。荒廃農地を農地として活用するべく提案しているのに耳を貸さない。また農業委員会にかけるべく、何度と無く要請もした。しかしこれまでもかけた形跡も無い。農地は耕されて初めて農地である。怠慢な行政に怒りを覚え、宮城翁の無念さを今改めて思い、翁の遺志を継いで行くことが残されたものの務めであると思ふ。

八王子市 伊藤 公博

今日の学園花の村は宮城さんの真摯な報徳学習の延長線上にある。あなたの生涯には佐藤一斎の言葉が相応しい。

少而学則壯而有為

壯而学則老而不衰

老而学則死而不朽

あなたは死して尚朽ちることはない。